

私の文学

高橋信之

初めに

大学入学以来の五十数年の歳月を文学と深く関わってきた。私の文学は、研究と創作の双方との程よい関係を保つことができ、そのことを幸運だと思っている。文学研究では、学生時代の早くからドイツ文学、特にトーマス・マン研究に集中することができた。また、学生時代に小説を書くことが出来たのも幸運であった。一時は、生涯の仕事としての創作活動を選びたいとも思ったが、文学研究を自分の仕事とし、大学院では、ドイツ文学語学の道を選んだ。

私の文学研究の方法は、文学と語学、あるいはドイツ文学と日本文学といった截然と区分した上でのドイツ文学研究の方法ではなく、ときには比較文学的研究の方法を取り入れることもある。あれば、インターネットを通して文学を見ることもある。これは、できるだけ広い視野で文学を読み、研究したいという、ただそれだけの、文学を見る一つの見方にほかならない。

私のトーマス・マン研究は、主として、作品研究であって、四編の長編小説を取り上げたが、その締めくくりには、「トーマス・マンと三島由紀夫そして大江健三郎」を書いた。現代文学の特質は、文明批評にあるので、そこを明らかにするためであった。私の研究テーマは、「現代社会における文学の運命」となった。副題は、「時代を超えた人間性を求めて」である。

学生時代からの創作活動は、現代詩や小説から俳句に至るま

での幅広いもので、また、ドイツ、アメリカ、中国での国際交流もあって、それらを通じての研究成果がある。それは、『比較俳句論』、『総合俳句論』等であるが、ドイツ語の俳句を論じた「インターネットと文学―ドイツ語で書かれた俳句―」は、私のトーマス・マン研究のテーマである「現代における人間性」の問題を更に発展させ、一つの結論を得た。

① トーマス・マンの文学

トーマス・マンは、二十世紀という戦争の時代を生きた小説家で、この悲劇的な時代にあって、ナチの非人間性と戦ったのであるが、その戦いは、エラスムスに代表されるヨーロッパのユマニスム（人文主義）、ゲーテやトルストイ等に姿を変えたユマニスムに教えられた「時代を超えた人間性」を求めてのものであった。

(a) 論文「ファウスト博士の『Das Daemonische』について」では、第二次世界大戦でのドイツの悲劇を明らかにする。トーマス・マン長編小説『ファウスト博士』は、魔神的なもの（Das Daemonische）を物語るが、魔神的なものは、根源的な、原始的な、野蛮なものであり、秩序を無視する。天才的音楽家、アードリアン・レーヴァーキューンは、魔神的なものに取り憑かれ、一旦は称揚されたが、やがて暗黒の世界へ破滅していく。ドイツの運命も同じであった。

(b) 三つの論文「トーマス・マンの故郷」、『魔の山』における中間のイデー、「トーマス・マンと神話」では、人間の生の典型を明らかにするが、共通するテーマは、「時代を超えた人間性」である。長編『ブデンブローグ家の人々』は、マンの故郷

のリーベックを克明に描く。バルト海とワグナーの音楽が象徴している「死」は、人間の当然帰り着くべき世界で、すべてが訂正され、再び人間の生を宿すところであって、人間の「故郷」といつてもよい。『魔の山』の主人公カストルプにとって、死か生か、というのは問題ではなく、その中間が、つまり、死と生との対立を克服し、支配するための、イローニッシュな（反語的な）中間のイデー、中間的存在の、神である人間が問題なのである。マンの龐大な作品群を概観すると、市民的なものから、神話的なものへと発展しているが、マンの神話には、過去即未来という二重性がある。過去の「いつか」あった人類の生の典型は、神話に語り継がれ、未来にも再び「いつか」あらわれてくる。長編『ヨーゼフとその兄弟たち』が神話的な作品群を代表する。

(c) 日本の作家たちに与えたトーマス・マンの影響というテーマには、まずは、三島由紀夫が取り上げられるが、本質的に深く論ずるには大江健三郎がよい。それは、大江健三郎が「時代を超えた人間性」を求めているからである。論文「トーマス・マンと三島由紀夫」では、三島由紀夫がマンよりもニーチェの影響を深く受けていることを明らかにする。三島の二元論は、マンよりもニーチェに近い。ニーチェの二元論的な世界は、ディオニソス的なものを論ずるための前提であったとみられ、三島には、マンの二元論よりは、ニーチェのディオニソス的な唯美主義が色濃く影を落としている。これは、マンの中間のイデー、中間のモラルとは違って「死」に与するものである。論文「トーマス・マンと三島由紀夫そして大江健三郎」は、三島と大江の違いを浮き彫りにし、そこに「人間性」の問題を指摘する。「文学のすぐれたものは、なによりも僕らに励ましをあ

たえる。」という大江は、トーマス・マンにも「救助」をもとめ「励まし」をあたえられた。マンの作品に描かれた人物の「人間らしい」生き方を見て励まされたのである。文学作品上の「人間らしい」ものと言えば、フモール（真のユーモア）である。トーマス・マンや大江健三郎の「人間らしさ」、そして文体上のフモール、これらは、「時代を超えた人間性」からくるもので、現代社会と文学を強く結びつけてくれるし、文学は、現代社会のなかでの力を得ることができる。

② 世界の俳句と日本の俳句

俳句をはじめ、現代詩や小説の実作という幅広い創作活動のなかから生まれた私の論文は、またドイツ、アメリカ、中国等での国際交流を通じての研究成果なので、すべてが特異なものとなった。

(a) 著書『比較俳句論序説』は、「世界の俳句と日本の俳句」を論じたもので、欧米に伝えられた日本の俳句が日本語の俳句とは違った独自の発展の道を歩んだ経緯を分析し、そこから日本の俳句の本質、「虚実」、「風雅の誠」、「色即是空」を明らかにする。『比較俳句論序説』を補足する論文に著書『芭蕉とネットの時代』がある。芭蕉の「虚実」、「風雅の誠」は、白田亜浪の「俳句のまこと」に及び、「ネットの時代」とも言われる現代の俳句の本質論として俳句における「色即是空」の論を展開する。色とは現象界の万物をいい、これらの万物は、因縁の所生なので、そのまま本性の空である。

(b) 論文「総合俳句論」と論文「インターネットと文学―ドイツ語で書かれた俳句―」でもって、私のトーマス・マン研究

のテーマである「現代における人間性」の問題は、一つの結論を得た。現代にも「生の確認」や「人間的なもの」を求めている文学行為がある。「総合俳句論」は、電子書籍として発表されているが、「インターネットと文学―ドイツ語で書かれた俳句―」は、「成城大学経済研究」一四二号（信岡資生名誉教授退任記念論文集、平成十年十月）に収載されたもので、この論文は、「ドイツ語で書かれた俳句」の分析に多くを割いているが、ゲーテ、シラー、トーマス・マンなど、ドイツの文豪達を取り上げ、「ドイツ語俳句」という現代文学にも「生の確認」や「人間的なもの」を求めている行為があることを明らかにした。

○論文「トーマス・マン研究―現代社会における文学の運命―」

第1章 ファウスト博士の『Das Daemonische』について

第2章 『魔の山』における中間のイデー

第3章 トーマス・マンの故郷

第4章 トーマス・マンと神話

第5章 トーマス・マンと三島由紀夫そして大江健三郎

<http://kakan.info/nobuyuki/02/man.pdf>

○著書『比較俳句論序説―世界の俳句と日本の俳句―』

<http://kakan.info/nobuyuki/02/haiku1.htm>

○電子書籍『総合俳句論―多様な俳句への新たな展開を―』

http://kakan.info/books/sogo_haikuron/

○論文「インターネットと文学―ドイツ語で書かれた俳句―」

<http://kakan.info/nobuyuki/02/haiku3.pdf>